金沢文庫所蔵

群疑論疑芥について

坪井俊英

釈浄土群疑論七巻は善導の弟子懐感の著わしたもので、浄土教に対する諸種の非難疑惑をば、法相唯識の立場より解明せるものである。その内容は一二三番問答よりなる、本論の釈書として支那には存せず、日本にもその伝来は、奈良朝の昔に伝わっているが、これの釈書が作られたのは鎌倉時代に入らなければならぬ。鎌倉時代になりて奈良の旧仏教の復興し、又法然の浄土教の盛行するに及び、本論の研究に関心がもたれ、数多くの釈書が作製されたのである。

本書は昭和八年金沢文庫古逸書の中より発見せられたもので、今日までその名前すら伝わっていなかった稀覯書である。著者名なく、また奥書もないために、誰れの著作書か不明である。現存するものは六、七、八の三冊のみであって、他は散佚して伝わらず、表紙の中央に群疑論疑芥、（第六、第七、第八）と、それ〴〵書かれていて、左下に伝覚静とあり、その左に小字で西観とかかれている。（西観なる名のあるは第六と第八のみ）。内題は第六巻と第七巻とには浄土疑芥（道中諸経所群疑論第六（第七））と書かれてあり、第八巻のみは第八問答、仏身無虫義とある。大和綴、第六巻は三十三葉、第七巻は五十三葉、第八巻は二十葉あり、一面十行又は十一行、字数一定せず、第八巻のみ一面十五行で細密に書かれている。約七百年程前の鎌倉時代の古写本なる故に虫害も少なくなく、解読に困難を

感ずる処も多々ある。

この疑杵が何巻あつたかは不明であるが、現存の形式より推定するに、この前に五巻あつたことが解かる。従つて金沢文庫に蔵されている疑竹は本来八巻八冊あつたと思われる。疑杵の著者について坂本、石橋、恵谷諸先生の研究により、法然上人門下の覚明房長西の撰述であることは明瞭であるが、筆者人は明らかでない。表題下に伝覚禅、西觀とあるが、両人とも伝不明である。覚明房のことかと云う人もあるが、この語は覚禅の伝持したことを示す語と見られるから、覚禅の所持本とすべきであろう。

この内容を見ると、懐感の群疑論七巻を逐文解釈したもので、現存疑杵の第六巻は論文第六巻を（但し三分の二程度で後は散佚す）第七巻は論文第七巻全巻を釈している。これで群疑論の釈は完結しているが、文庫所蔵の疑杵にはこの次に第八巻と名づけられるものがある。

この疑杵の第八巻は前述のごとく内題は第八問答只身無義とありて、第六巻第七巻の内題とは異なる。この問答は第八問答より第二十三問答までである。それでこの問答は群疑論のいづこを釈したものか調べて見ると、実は第六巻の後半以下を釈したものである。この問答名を左に列記す。

第八問答只身無出義、第九去此不遠義、第十建心是仏義、第十一見無見頂義、第十二見一是諸義、第十三生諸仏前義、第十四即見仏心義、第十五九品生位義、第十六不退的處義、第十七中下望逆義、第十八滅罪多少義、第十九二法滅罪義、第二十見足十念義、第二十一臨終念仏、第二十二短上功德義、第二十三念仏異異義　となつている。これを元德二年（AD一三三。）奥書によりて書写された群疑論大科列章を比較すると、名目に類似のものが見出されると共に、この疑杵第八巻は群疑論の第六巻の後半の釈書であることが知られる。而してこれらが第八問答を以て初まつているから

して、その前に七個の問答があったことが解る。更にこの第八巻と疑杵第六巻を比較してみると、両者全然別個の釈書であり、表題に同じく群疑論疑杵と書かれているが、この疑杵第八巻は第七巻に続いてあるものでなく、全然別のものとして取り扱うべきである。

この第八巻は上記のごとく第八問答より始まり、その前を欠くが、この前の七個の問答を真慧の大科別章によりて見ると、第一、一切生不章、二、清素國土章、三、五通超勝章、四、分段長易章、五、極樂無苦章、六、極樂度苦章、七、八識三受章の七項に関する問答のあったことが解かる。

すると これは第六巻全部の釈書である。

されば群疑論疑杵と名づけられる釋書に二種あることになる。浄土疑杵なる内題をもつ全七巻の疑杵と、第一問答より第二十三問答で終る疑杵なる釈書である。現存疑杵第八巻は上記のごとく行数も多く細字で書かれていて、初めの第八、第九、第十問答は比較的詳細であるが、第十七問答以下は至極簡略されている。されば この問答なる内題を有する疑杵は何人のものかと云うに、長西が群疑論を講じ、再び重ねて第六巻のみを別に釈したとするには余りに内容が違っているからして、長西とはすること出来ず、徳川時代の浄土宗の学匠である大玄の群疑論玄談一巻の説によると長西の弟子意乘なるものに意乘抄なる群疑論の釈書のあったことを伝えているからして、この疑杵第八巻はこの意乘の抄釈したものでないかと思われる。

そ小で慧明房長西が群疑論を講じて疑杵七巻を作り、その弟子意乘も亦本論を抄釈したとすべきであろう。この意乘の抄釈したものが、その前半を失われ、筆写人が誤って合冊にして、金沢文庫に所蔵されているごとく、疑杵第八巻としたものと思われる。

（浄土学研究室事務主任教授）